

私は1996(平成8)年12月から1997(平成9)年3月まで、国立極地研究所の国際協同プロジェクトの一環として、中国が南極に開設している中山基地に派遣される幸運を得た。主たる任務は、中山基地にリオメータのアンテナを設置することであったが、その他にもオーロラ全天カメラや磁力計設置の任務などもあった。

そのための準備作業は1994(平成6)年度中には始まり、当時私は杉浦先生、荒木先生、寺澤先生、町田先生、家森先生にご指導を受けてD論を書き、学位を授与していただいて岐阜にある朝日大学に赴任したばかりであったが、加えて何度も東京の国立極地研究所に足を運ぶこととなった。国立極地研究所は現在は立川市にあるが、当時は板橋にあった。

中国との国際協同プロジェクトということで、上海の中国極地研究所とも人的交流があり、特に、昭和基地で越冬経験のある楊恵根氏はじめ、数名の中国極地研究所所属の科学者とも面識を得ることができた。楊恵根氏が昭和基地で越冬したのとは逆に、今度は日本側人員が中国の中山基地に滞在する(ただし夏季のみ。越冬はしない)予定となっていた。幸運なことに、私もその1人として選ばれたのであった。

上記のように、私は中山基地には夏季の約2カ月間の滞在だけであり、越冬はしなかったのであるが、越冬中の中国人隊員たちのために、荒木先生はJGRのバックナンバーを多数寄贈してくださった。もちろん、越冬隊員だけでなく夏隊員も使ってよいわけであるが、夏季オペレーション中は誰もが非常に忙しく、論文を読んでいる時間はほとんど取れなかった。しかし越冬中ともなれば時間の余裕も生まれるであろうし、基地でも論文が読めるようにと、荒木先生が特に寄贈してくださったものであった。

当時はWindows95が出たばかりでMS-DOSもまだまだ使われており、PCもまったくもって非力で、論文をpdf化してPC上で読むなど考えられない時代であった。したがって、製本したJGRの冊子を1ページずつめくって、昔ながらのアナログな方式で読むしかなかったのである。それで、我々は基地の図書室に本棚を入れ、荒木先生からいただいたJGRを配架した。中国の隊員はわざわざ「荒木文庫」と書かれたプレートまで用意してくれていた(写真1:南極中山基地の図書室に設けられた荒木文庫の前でプレートを持つ筆者)。

これがご縁で、私は中国極地研究所の方々とその後も交流が続いた。楊恵根氏はその後日本に留学される機会があり、私が荒木先生にお願いして、楊恵根氏を当研究室で1年間受け入れていただけることとなった。即座に承諾してくださった荒木先生には、大変感謝している。



楊恵根氏はその後、中国極地研究所の所長となられ、定年退官後の荒木先生を中国極地研究所の外国人研究者としてご招聘くださった。これは私が楊恵根氏に依頼したことは全くなく、楊恵根氏ご自身の発案であったが、間接的ながら荒木先生に恩返しができたのではないかと思ひ、楊恵根氏には大いに感謝している。

2009(平成 21)年 7 月 22 日、上海で皆既日食が見られた。家森先生率いる当研究室でも、日食時の地磁気変化の観測のために、上海に遠征することが計画されていた。その当時、私は京都大学大学院理学研究科の非常勤講師を委嘱され、学生の方々に対するプログラミングの講義、およびこの日食時の地磁気観測のためのデータ収集ソフト開発の仕事に従事していた。

実は、当研究室の源流は理学部の長谷川万吉教授であり、長谷川教授は戦前から戦後にかけて、何度も日食時の地磁気変化の観測に挑戦しており、日食時の地磁気変化は当研究室の伝統ともいえる研究テーマであったのである。ただし、何の祟りか、観測を計画した日食時には毎回大きな磁気嵐が起こり、なかなか所望の地磁気変化は確認できなかったとのことであった。

日食の前々日、2009(平成 21)年 7 月 20 日、我々は上海に到着し、中国極地研究所主催の歓迎夕食会が開かれた。その席に荒木先生も出席され、「I am Tohru Araki from Polar Research Institute of China. So, I welcome all of you.」と挨拶されたのが印象的であった(写真 2: 皆様を歓迎いたしますと笑顔で挨拶される荒木先生)。

日食自体は天候が良くなく、雲の隙間からわずかに皆既食の太陽が顔をのぞかせただけであった。その上、またしても前日から磁気嵐が起こってしまい、期待した日食時の地磁気変化も、それほど明瞭にはとらえられなかったのは大変に残念であった。

このほか、荒木先生は常々

「magnetogram rescue project を推進すべき」と言われており、世界各国の地磁気観測所に所蔵されている貴重な古いマグネトグラムをデジタル化して半永久的に保存することを提案されていた。

ともすると、我々は最先端の研究ばかりに目が向き、古くからの歴史を軽視しがちになることが多いが、荒木先生の温故知新を大切にされる考え方には大変感銘を受けた。私が科学史(地球電磁気学史)の研究を専門にしようと考えたのも、荒木先生からの影響が大きかったことは事実である。

荒木先生からは、私が学部 4 回生の課題研究の時から博士課程を修了するまで、ずっとご指導を受けたのみならず、その後朝日大学に赴任してからも続けてご指導くださった。日本における SC 研究史について調べ、論文にまとめてはどうかとのご提案も、荒木先生からいただいたものである。また、当研究室出身で朝日大学名誉教授の永野先生と共著で執



筆している『日本の地球電磁気学』の著書計画についても、荒木先生は常々サポートしてくださっていた。

SC 研究グループのメーリングリストで荒木先生からご病気のことを直接お聞きし、大変にショックを受けたのみならず、『日本の地球電磁気学』を荒木先生にお見せすることが叶わなかったことは、非常に心残りに感じている。きつとつらい、大変な治療であったと思われるが、今このような状態ですと荒木先生は淡々のご報告くださっていた。手強い病気ではあるが、予想よりはいい状態で治療が推移しているとも伺っていたが、突然の訃報に接して言葉もなく、驚きと悲しみとを禁じ得なかった。荒木先生を失ったことは、日本のみならず世界の地球惑星科学界の大きな損失である。荒木先生のご冥福を心よりお祈りするとともに、1日も早く著書を仕上げ、天国の荒木先生にお届けしたい。

<秘話>

このような個人的なことをここに書いて公開することは果たして適切かどうか非常に迷ったのであるが、荒木先生に大変にお世話になったことであるので、意を決して記述することにした。

実は、私は荒木先生にお金をお借りしたことがあったのである。

1991(平成3)年8月、ウィーンで第20回 IUGG 総会が開かれた。荒木先生は常々、「学生の皆さんは、夏休みの海外旅行を兼ねて国際学会に参加するといいですよ」と勧めてくださっていた。それで、当時院生であった私もこれに参加することに決め、往復ともにシベリア鉄道で行く旅程を組んでいた。

大阪から夜行列車で新潟まで行き、新潟からハバロフスクまでは JAL で飛んで、そこから特急ロシア号に乗り、7日かけてモスクワまで行った。さらに列車を乗り継いで3日かけてプラハまで行き、そこでまた乗り換えて、ウィーンに着いた。

ウィーンでの学会自体は順調であったが、学会終了の直前になって、滞在先のユースホテルに自宅から「KYUUYOU ARI」の電報が来た。インターネットなど一般には使えない時代であったので、真夜中に公衆電話から国際電話を掛けた。

両親が言う急用とは、モスクワでクーデターが起きて、ゴルバチョフが失脚したということであった。私はそれが何の急用なのかピンと来なかったが、父は絶対にシベリア鉄道では帰ってくるなと言っていた。そもそも、父は、私が行く前から、「あんな北方領土取って返さんような国を通って行くのはやめてまえ！」と怒っていたのであるが、私は無視してシベリア鉄道で来たのであった。しかし、帰路もシベリア鉄道であったため、「そやさかいに言わんこっちゃない。クーデターが起きたやないか。今テレビで報道してるけど、モスクワは戦車が出てきてえらいことになるとるんや。こんなときのこのこソ連に行ったりしたら、捕まって殺されるんや。ロシア人ちゅうのは、外国人を皆殺しにする民族なんや。絶対にシベリア鉄道で帰ってきたらあかんぞ」と言う父の声が聞こえてきた。

そんなこと言っても、ウィーンから日本まで帰る航空券を買うお金など持ってきていない。それで、駅に行ってモスクワからの国際列車が運行されているかどうか聞いたが、正常に発着しているとの話であった。空港にも問い合わせたが、ソ連各地からの航空便は正常に運行されているとのことであった。それで、予定通りシベリア鉄道で帰ることに決め、家

に連絡した。

しかし、家からは絶対にシベリア鉄道では帰ってこないようにとの話であった。それで、ウィーンにいられていた荒木先生に相談したが、「現在鉄道も航空便も正常運行しているかもしれないが、鉄道で帰国するとなるとソ連を通過するのに1週間ほどかかる。その間に情勢が変化し、ソ連を出国できなくなる危険性がないとも限らない。ここはご家族の言うように、こちらで航空券を新たに購入して、飛行機で帰国したほうがいいのではないか」とのご助言をいただいた。

それで、まずウィーンの JAL の支店に行った。しかし、「日本までの片道航空券は35万円になります」というつれない返事であった。全くのノーマル運賃を出してきた。とても払えない。次に、ANA の支店に行った。こちらは、「サベナ航空による運航になりますが、ブリュッセル経由で片道15万円の特別運賃がございます」とのことであった。サベナとの共同運航便であったためであろうが、日本でうちの家族が ANA に支払いをした場合はこの運賃は適用されず、どうしてもウィーンで支払いをしなければならないとのことであった。JAL よりかはるかに安かったが、それでも学生にとっては大金で、そんなお金は持ってきていなかった。この時には知る由もなかったが、サベナ航空は当時経営危機に陥っており、それでこのような、航空券の高いウィーンでしかも夏のピークシーズンであったのに、破格の航空券を出していたのかもしれない。

実は、このとき親切に航空運賃を立て替えてくださったのは荒木先生であった。この場をお借りして、荒木先生には再度お礼申し上げたい。そのおかげで私は無事日本に戻ることができた。お借りしたお金は帰国後すぐにご返済したことは言うまでもない。